

講師紹介

牛久保結紀さん

私は25年あまり看護師として病院、在宅看護に携わってきました。看護師という職業はとても魅力のある仕事であり、人生の糧でもありました。しかし、ALSという疾患の発症により退職を余儀なくされました。そして、病によって気付かされた事がたくさんありました。看護師として難病を抱えながら生活を送られている方に対して誠意をもって向かい合い、理解できていると思いつながら支援していましたが、実際にALSになりまだまだ足りなかったところがあった事、なにげなくいつも傍にいる家族の大切さを知る事ができました。経験や知識が豊富という訳ではありませんが、医療に携わる側と医療を受ける側を体験して知り得た事や看護に必要な事、気付いた事を伝えられたらと思います。

時代の変化と共に医療も進化し看護の現状も変わってきています。それでも基本である人と人との関わりは変わりないと思います。

私の話しが、援助者である皆さまに、病む人たちの力となり希望となれる介護・看護の提供に少しでもお役にたつ事ができましたら幸いです。

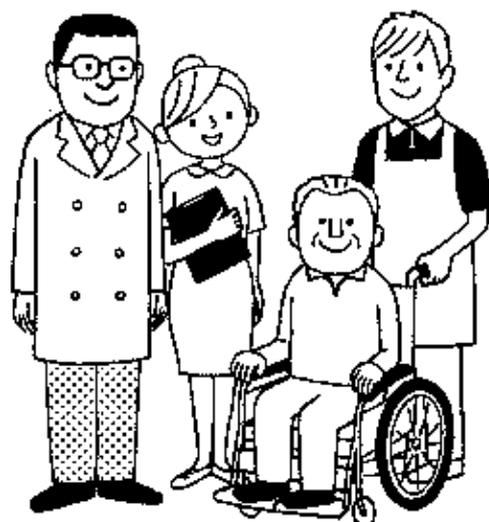
原敬(はら たかし)医師

消化器外科医20年ののち緩和ケア医に転じ8年。わたしは緩和ケアチーム専従医師として、ホスピス・緩和ケア病棟ではなく一貫してがん治療の現場に勤務していますが、そこには援助される人だけでなく、援助する人が苦しむ姿もあります。相手の苦しむ姿はこちらをも苦しくさせます。どうにかならないのか、どうにかしなくてはという、からだの中から突き上げるような、ときに慣りにも似た心情を湧きあがらせます。相手の苦しみが和らぐ姿はわたしたちを元気にしますが、逆に相手の苦しむ姿が変わらないとき、援助しようとするわたしたち自身も意味を失い苦しむことになるのです。それは、わたしたちが他者に反応し他者との関係のなかで生きている存在だからであり、支える人は支えられるひとから意味を与えられているからです。

このように「人がひとを援助するということ」は意味のやりとりですが、それはいったいどのような営みなのか、苦しみが和らぐとは何なのか。職種や現場のちがいを越えて「援助」という同じ営みのなかにいる人が集うこの会で、そのようなことをゆっくりお話してみたいと思います。

プログラム

- ① 13:00 受付開始
- ② 13:25 開会の挨拶
- ③ 13:30~14:15
牛久保結紀さん「援助する側から援助される側になって、気付いたこと」
- ④ 14:30~16:30
原敬医師「人がひとを援助するということ」
- ⑤ 16:40 閉会



ご案内

高崎地域緩和ケアネットワークの会 (代表、小笠原一夫医師)

高崎地域において、緩和ケアのネットワーク構築を実現していくための会です。偶数月に井戸端相談会、奇数月に世話人会を行っています。まずは、井戸端相談会に来ませんか？メーリングリストを用いて、案内や情報交換を行っています。ご希望される方は、表紙のアドレスにご連絡ください。